

鎌倉滑川河道の再検討

A Re-examination of the Course of the Namerigawa River in Kamakura

南出眞助

はじめに

- ① 滑川移動説の系譜
- ② 筆者による旧河道復原案
- ③ 前稿以後の知見

おわりに

【論文要旨】

筆者は、前稿「近世鎌倉における滑川の河道変遷」(『地図と歴史空間』2000年)において、17~19世紀の古文書・旅行記・絵図類、明治初期の地籍図、1:500地形図、空中写真、ボーリングデータ、中世遺跡発掘資料などを用いて、滑川旧河口の位置と砂丘の内側を蛇行する旧河道ルートを推定した。本稿では、それ以後に筆者が確認した資料を交えて自説を補強するとともに、他の旧河道存在の可能性も再検討した。結論は以下の諸点である。①「えんま川」と呼ばれていた旧河道は、宝永2年(1705)の「油井浜間数之覚」によれば、現河口より350~400m東方にあり、絵図類によれば、元禄16年(1703)の地震で倒壊した新居閣魔堂の東側を回り込んで海に注いでいた。途中の河道痕跡は、明治期の地籍図で田に分類される平坦地にほぼ該当し、場所によってはラグーン状にふくらんでいた。この河道の存在は中世まで遡りうるが、時代によって数十メートル程度の移動も考えられる。ただし、長期間にわたって同時に2本の河道が由比ヶ浜砂丘を横断していた可能性は小さい。②旧河口は砂丘によって狭められており、砂丘の内側には、海面から1.5~2.4m程度の水位差を有する沼地ないし湿地が形成されていた。中世の遺溝面が検出される標高3.4m地点までは、一時的にせよ水面下に没したことがある可能性が大きい。飛砂・流砂によって河口が閉塞した場合や台風の異常高潮時には、4~5m程度まで冠水することもあった。③現河道へ移動した時期は、『鎌倉攬勝考』成立の文政12年(1829)以後、『新編相模国風土記稿』完成の天保12年(1841)以前の可能性が大きい。1829年以前の可能性もあるが、1841年以後の可能性はほとんどない。④この旧河道は平常時の水深が浅く、水運にはあまり適さなかった。平底の小舟なら、曳舟として部分的な通行は可能であっただろうが、とりわけ砂丘横断部は浅く、通過にくかったと思われる。